

山背に発達した湿原(約 1550 m の所)で発見された(指田豊, July 6, 1964)。此の標本は都立大牧野標本館にある。(牧野標本館 水島正美)

〇コホタルイ *Scirpus smithii* A. Gray subsp. *leiocarpus* (Komarov) T. Koyama
1965年8月26日群馬県館林市近藤の荒廃した水田中で発見した。その付近には、タマガヤツリ、シカクイ、ヒロハイスノヒゲ、サンカクイ等が混生していた。コホタルイの形態を観察した結果を記してみると次のようである。稈高約 60 cm, 苞葉約 25 cm, 茎の太さ 1 mm~2 mm, 小穂の長さ 4 mm~1 cm, 果実の長さ約 1.5 mm, 小穂の幅約 3 mm, 小穂の数 1~20 個, 刺針状苞被片は実の 1.5 倍, 刺針状苞被片の数 5 本, 柱頭 2 本, 以上であった。分布は温帯~寒帯(山梨県, 青森県)北海道, 朝鮮, 満州で本州の分布は少ないようである。

〇ヒメアブラススキ *Bothriochla parviflora* ohwi 1965年12月3日群馬県館林市多々良の山林で発見する。自生地の環境はアカマツ林の道端の向陽地で、トダシバ、アブラススキとならんでかなり見られた。丈高く 1 m をこえるものが多かった。尚、筆者は、1964年10月に栃木県葛生町の山林で、1965年9月24日栃木県足利市大岩の山林で見出している。暖地性のもので群馬県南部、栃木県の東南の丘陵地帯が分布の北限地帯と思われる。分布は“武蔵野の植物”によると本州(房総半島以西の南岸)四国, 九州, 琉球, 台湾, 南中国, インドシナ, 印度である。終りにのぞみ御教示いただいた松山庫三先生に謝意を表します。(群馬県館林市立第二中学校 松沢篤郎)

中国における日本のツバキの古記録 (津山 尚) Takasi TUYAMA: Ancient records of *Camellia japonica* in the Chinese literatures

京都大学の北村四郎教授は植物分類地理 30: 49 (1962) で、白楽天の詩(824年)を引用し、詩の中の海榴は、註の中の海石榴と同じもので、日本書紀(720年)などに出ている海石榴と同じく、日本のツバキと同じ意味であるとし、古く唐代に河南省の中原の地にツバキが栽培されていた証拠となるとの論を展開された。小生はここで日本の諸記録より早い随代(604~617年)に中原の地でツバキが栽培されていたことを述べたい。

海榴が海石榴と同じものであるとの証拠は、日本側の古い記録にもある。それは出雲風土記(733年)で、この中の諸郡の産物を記した所に椿, 海石榴, 海榴が散見する。特に意宇郡(オウノコオリ)の条には「海榴(或は椿に作る)」とあり、これら 3 者を互に通じてツバキの意に用いられたことが分る。これは徳川時代の考証にも出ていて、例えば屋代弘賢の古今要覧稿には、岡村尚謙の言を引用して「風土記に海榴字或作椿と見えれば海榴は即海石榴の省呼なるはしるし」とある。万葉集をはじめ日本の他の古文獻には椿, 海石榴, 都婆伎, 都婆吉は出ているが、海榴は他に見当らぬようである。椿とツ

バキとの混同(椿を国字と見ない説による)は中国では全く起っていないから、今は椿に關しては論外に置く。海榴は北村博士も示唆されるように中国において作詩上の技巧として海石榴の短縮したものであろう。石榴はザクロのことで、漢の張騫が西域からもたらしたことは有名な話である。中国で海を冠した名詞は東方の海を経て輸入されたものであり、海松がチョウセンマツ、洋菊が西洋菊というように今日までそのやり方は同じである。即ちツバキを海石榴というのは中国人の発想に基く命名であって、日本産のものに日本人がつけた名でないことは明らかである。そうすると日本の古文獻より先に中国の文獻に、海石榴が出ていなければならないことになる。それで試みに諸橋氏の大漢和辭典にあたって見た所 海石榴=海榴とし、白樂天の詩の他に孫逖の次の詩句があった。詠樓前海石榴、伝君妓樓好 初落海榴花。孫逖は唐初武水の人で唐中期の白樂天よりずっと古い人である。更にお茶の水女子大学の頼惟勤教授の教えを願って探索したところが、隋の煬帝の次の詩に行き当たった。これが調べた限りで最も古い海榴の記録である。宴東堂、雨罷春花潤 日落隰霞暉 海榴舒開尽 山桜開未飛 清音出歌扇 涼香飄(一作颺)無衣 翠帳全臨戸 金屏半隱扉 風花意無極 芳樹晚禽歸。東堂がどこにあったか不明であるが恐らくは洛陽であったであろう。煬帝は荒淫暴虐下不堪命といわれたほどの人物であったが、一面大運河の開さくなどの業をおこしたりした、豪勢なロマンティストでもあった。上述の詩は彼の在位が604~617年であるからその頃の作であろう。同文の民の誼で1300年を経てなお直接にその詩境がやや理解できるのは有難いことである。ツバキの花は落ち尽し、山桜は万開でまだ散らないという風趣はそのまま日本でのツバキとサクラに当てはめることができそうである。この詩の歌われた時は日本の飛鳥時代の初めで、日本ではまとまった文獻は勿論まだ何もない時代である。例えば日本書紀推古16年(608)に「迎唐客海石榴市衢」というのがあるが、この書の編集は672年より少し後に始まっているからこれを608年の文獻と見ることはできない。

それでは煬帝の海榴はほんとうに日本のツバキであっただろうか。唐代に海石榴または海榴をうたった詩人は案外に多い。大体年代順に記すと、宗之間、孫逖、李白、韋応物、皇甫冉、季嘉祐、権徳輿、柳宗元、白居易(樂天)、元稹、杜牧、皮日休、陸龜蒙、方干、劉言史で、散文中にもいろいろ出て来る。これらの詩の中で石榴との混同があると困るので、詩の鑑賞にはお茶の水女子大の倉田淳之助教授の指導をあおいだ。ザクロは落葉樹であり、花期が夏秋であるので、たとえ詩の二次的の景物として入っている場合でも明かに区別できることが多かった。これらを通読して海石榴=ツバキの印象をうけるのである。

今中国大陆におけるツバキ属の分布を見るのに、四川省の北部、湖北、安徽、江蘇の中・北部を含んでそれより北側には自然分布は全くない。従って隋唐文化の中心である洛陽、長安(西安)を含む中原の地にはツバキ属を産しない。これは気温の低いことと乾燥が原因と思う。また分布限界にはツバキ属はあっても日本のツバキに似たものはな

く、みな小さい白い花のものばかりである。したがって西南部の亜熱帯あるいは暖帯に生育する美しいツバキ属、*C. pitardii*, *C. saluensis*, *C. reticulata* など Sect. *Camellia* に属する種は中原の露地では育たない。所が日本のツバキは産地が北に片寄り、これらよりも寒気に耐えるので、戸外でも少し場所を選べば中原で生育が可能であると思われる。現に富樫誠氏はツバキ属天然生育限界の北にある山東の露地で日本の椿が生育しているのを見たといわれるし、Forbes & Hemsley の山東での記録も、このような状態のものであったと想像している。これらの事実からも煬帝その他が詠じた海石榴は日本のツバキであったと推定する。なお舟山列島にツバキが自生していることは、Sealy 氏によると否定的である。また楊子江下流地域で最近、*Camellia chekiangoleosa* Hu なる一見ツバキに似た種が報告されているが、これは少し高い山地に産するもので、古代には中央では勿論知られていなかったものとして論を進めた。

以上の記述で、隋唐時代に中原の地に日本のツバキが栽培されていたことが推定できる。ツバキは朝鮮南部にも自生があるが、日本から遺隋・唐船で直接に、あるいは別の非公式の手段で移入されたことも考えられる。丁度ウメ、モモその他の観賞植物が、多く大陸から逆のコースで日本に入り日本の文化に大きい影響を及ぼしたように。もしツバキが日本から中国に入ったとすると、このような輸出はむしろ稀有の例であろう。動物に関しては日本から彼の地に渡ったものはないと聞いている。

ここに唐末から山茶なる語ができて、ツバキまたはツバキに近似のツバキ属の一般名称となって来て、海石榴の語が捨てられる。その次第は次のようであったらしい。唐末段成式の西陽雜俎続集卷 9 には、北村教授も引用していられるように、「山茶は海石榴に似る。桂州および蜀地に産する」由の文がある。桂、蜀は今日の広西、四川であり、現在の植物学で分っている所に照すとこの山茶は *Camellia pitardii* の分布地と合う。もっともこの種の分布の中心である貴州省にこの文献は言及していない。蜀の盆地は比較的早く文化が開けていて、山越えに涪水を通じて中原の地との交通があったし、広西省とは海を通じて連絡できたので、自然貴州省のツバキ属が知られるのがおくれたともとれる。いずれにしても段成式の文から中央では海石榴の方が早く知られ、山茶の方が後から知られたことが判る。晋の嵇含の南方草山状も山茶を用いている。北宋、南宋、元、明の諸詩人、文人はすべてツバキ属に対して山茶を用いている。発見した唯一の例外は方九功で春花落尽海石榴開……と詠じている。この様に海石榴が捨てられ、山茶になったのは、前者が中国語として熟していなかったからであろうと想像する。南宋の范成大の桂海虞衡志、明の李明珍の本草綱目、謝肇淛の南雲志、王象晋の群芳譜などみなしかりである。これに従って日本の文献でも中国に従って海石榴が捨てられ山茶が採られた。通俗には山茶花はサザンカとなり、椿が上古以来ツバキに用いられているのは現在知られているとおりである。

山茶の語源に関しては次のように少し乱暴な想像をしている。頼教授によると茶はも

と前漢時代には茶と書かれトと発音され、初めは地名であったが、斉の時代には *Lactuca* または *Sonchus* のような苦い味のする植物の名となり、苦茶の名もあった。茶毘(ダビ)などはこの時代の発音の名残かも知れない由。茶の飲用はその原産地雲南省のメコン河に沿う思茅 (Sumao) で初まったといわれ、これが急速に中国全土に広がるのである。日本や欧米では茶とツバキは初めから全く別のものであるとして理解されたが、中国ではそうでなかった。数 10 種のツバキ属を産する中国西南部では茶からツバキに到る中間的なあらゆる形態のツバキ属の各種があるので、ツバキまたはツバキに近い種類を「……山茶」と名付けることは、ごく自然の心理であつたろう。このようにしてツバキやその類似種の一般名として、山茶が優占して来たものであろう。

以上を書くのに関して、頼惟勤教授の種々の御教示を感謝する。また唐詩などの理解に関して多くの示唆を与えられた倉田淳之助教授にも謝意を表する。

(お茶の水女子大学)

○マメ科植物の新学名と新組合わせ (大橋広好) Hiroyoshi OHASHI: Nomenclatural note on some taxa of Leguminosae.

In the course of my studies on Asiatic plants of Leguminosae, I encountered some nomenclatural problems to be settled. The purpose of the present note is to publish the following five new combinations and one new name.

1). *Dendrolobium quinquepetalum* (Blanco) Ohashi, comb. nov.

Cytisus quinquepetalus Blanco, Fl. Filip. 598 (1837)—*Cajanus quinquepetalus* (Blanco) Blanco, Fl. Filip. ed. 2, 417 (1845)—*Glycine cajanoides* Walpers in Nov. Act. Acad. Nat. Cur. 19, Suppl. 1: 324 (1843)—*Desmodium quinquepetalum* (Blanco) Merrill in Bur. Govt. Lab. Manila Publ. 35: 20 (1906); Enum. Philip. Pl. 2: 288 (1923).

2). In the genus *Pteroloma* the following new combinations become necessary.

Pteroloma triquetrum (L.) Benth in Miquel, Pl. Jungh. 217 (1852)

subsp. *alatum* (DC.) Ohashi, comb. nov.

Desmodium alatum DC., Mém. Leg. 7: 321 et Prodr. 2: 326 (1825)—*D. triquetrum* subsp. *alatum* (DC.) Prain in Journ. Asiat. Soc. Beng. 66 (2): 390 (1897)—*P. alatum* (DC.) Schindler in Fedde, Rep. 20: 272 (1924).

subsp. *auriculatum* (DC.) Ohashi, comb. nov.

Desmodium auriculatum DC., Prodr. 2: 326 (1825)—*P. auriculatum* (DC.) Miquel, Fl. Ind. Bat. 1, 1: 258 (1855) pro parte; Schindl., l. c. 272 (1924)—*D. triquetrum* (DC.) Prain in Journ. Asiat. Soc. Beng. 66 (2): 390 (1897).